

災害への備え 実体験から



倉堀さんの体験談に耳を傾ける参加者

大畑で学習会 震災被災者ら講演

むつ

県防災士会むつ支部（峯雅夫支部長）は17日、むつ市大畑地区の大安寺で「大畑防災学習会」を開いた。

地域住民や社会福祉、消防など各団体の関係者約100人が、東日本大震災で被災した人の体験談などを聞き、津波被害への備えや災害時の対応などを考えた。

大畑地区は、日本海溝・千島海溝沿いを震源とした巨大地震で、場所によっては10メートルを超える高さの津波が想定されている。同支部は、迅速な避難行動を取るために災害を自分事として考えてもらうとともに、地域の団体がつながることで災害時に地域で協力し合う「共助」の力を強めようと学習会を開いた。

東日本大震災直後から被災地の岩手県大槌町で地域防災活動が続けている青森県立大学の野坂真准教授は、同町安渡地区の事例から地域の特性を基に防災を考える重要性を説明。同地区独自の防災計画の内容や計画を作った経緯などを紹介し、「地域防災活動は、地域づくりの一環。レディーマード（既製品）ではなく、オーダーメイドの防災を考えることが大切」と語った。

東日本大震災で両親ら親族を亡くし、「大槌語り継ぐ会」代表を務める倉堀さん（大槌町在住）はオンラインで参加。野坂准教授との対談形式で、「避難所にいると（自分以外は）ほとんどが家族連れ。それを見ているとつらくなるので、避難所運営を手伝っていた」などと自身の経験を振り返り、「災害が発生したらまずは自分の命を守ってほしい。それが、周りの人の命を助けることにもつながる」と強調した。

大畑地区の湯坂下町内会の猪股健司会長は「自主防災組織の立ち上げを検討しているので参考になった。高齢者・要支援者を把握し、世代や住んでいる場所ごとに災害時の役割分担を考えていきたい」と話した。

（山内はるみ）